

# 巻 頭 言

国際経営研究所所長 海老澤 栄 一

ここ数年、天気予報で“観測史上初めて”の言葉を耳にする。地球上のどこかで大雨注意報と乾燥注意報とが“まだら”模様で随所に現われる。アメリカ産のトウモロコシが雨不足で収穫が大幅減、とテレビは伝えている。しかもトウモロコシは、ここ10年ほどの間に燃料としても利用されるようになってきており、その用途は人間、家畜、車と広がりを見せている。

異常気象の影響方向を探るのは、やさしいようで難しい。ひとつ言えることは、異常が続くと異常ではなくなり、正常化へのすり替えが起こる。論理の逆転現象が日常的に発生する。異常気象を“異常”とみなし、打つ手のすべてを公開し異常気象に加担している主体すべてが具体的に打開策を具体的に展開するときにきているように思う。

今回のフォーラムは、特集5、研究論文1、共同研究プロジェクト2、調査報告1、合計9篇と数からは、やや少ない結果となった。しかし特集が5篇あり、体裁は十分に整った。

特集のテーマは「国際物流の新動向と課題」である。韓国・中央大学の研究者から2、研究所の所員から3、合計5篇となった。5篇の領域は、物流を中心とした電子化分析、環境やグリーン政策にかかわる企業経営分野、港湾物量を中心にした国家戦略という多岐にわたった。5篇のうち4篇は、昨年度末に研究所の主催で行われた国際シンポジウム参加者の寄稿によるものである。企画主導で実現したプログラムである、といえよう。

毎年研究助成をしている共同研究プロジェクトの報告が2篇あった。1本は中小企業経営にかかわるテーマであり、他の1本は科学・技術・社会の三領域にまたがる架橋分野の調査報告である。“地震予知”という今、話題のテーマが報

告されている。

最後は調査報告である。2年にわたったアンケート調査結果および小中高校生対象の提言作文をまじえて、分析結果が報告されている。新しい取組として注目されている。今後は、具体的に市民レベルへの浸透が期待されている。

今、わが国の領土をめぐる国際紛争が3つ立て続けに起こっている。私のような“平和ボケ”にはちょうど良いカンフル剤になっている。今こそ、同じ土俵のうえで拳を振り上げて議論するのではなく、地球上の生きものの立場から国境を超えた地球人としての発想を取り入れることが重要なのではないだろうか。グリーン政策を中心とした国際物流のあり方もおのずからかわりをもつことになろう。